

山口昌男年譜

川村 伸 秀作成

一九三二(昭和六年)

八月二十日、北海道網走郡美幌町で父親(ちかし)、母みわのもとに九人兄弟姉妹(俊子、洋、享子、昌男、悦子、幸子、芳子、忠、和子)の次男として生まれる。父方の祖父は日露戦争で戦死。父親は明治二十九年、鳥取県倉吉市に近い大原村の庄屋の生まれ。地租改正で没落、寺の小僧、学校の給仕、木樵などを転々とした後、菓子店の技術を甥に学び、網走で菓子屋を営んでいた。母方は佐渡島の漁師で北海道サロマ湖の牡蠣島に移住した。母親は常呂で生まれ育ち、網走の綿打ち直し屋の息子と結婚したが死別し、その後親と再婚した。

幼い頃は泣き虫で家に閉じこもって流行歌、浪曲のレコードをすり切れるほど聴いたり、ざら紙を束ねた部厚い落書き帳に朝から晩までマンガを書いている気弱な子供だった。

一九三五(昭和十年) 四歳

菓子屋の小僧さんに連れられはじめて網走を訪れ、郷土博物館に強烈な印象を受ける。以後、博物館は中学・高校時代に何度も訪れた。

一九三六(昭和十二年) 五歳

六月 女満別村が皆既日蝕の国際的観測基地になり、魚屋をやっていた叔父の家に泊まりこみで観測村の見物に出かけた。

一九三八(昭和十三年) 七歳

美幌尋常小学校入学。勉強は出来る子供であった。

一九四〇(昭和十五年) 九歳

三学期にクラスの選挙で級長に選ばれたが、担任の先生に呼ばれ次点の級友の父親が農林学校の先生だからと級長の役を譲らされた。

一九四四(昭和十九年) 一三歳

旧制網走中学校入学。一年の時に、先夫と母親の子供であった義理の兄(康助)を発疹チフスで失う。当時義兄

は網走に住み、銀行に勤めていた。小さい頃から漫画や石膏デッサンを教わり、読書家でもあったこの義兄からは強い知的インパクトを受けた。

援農に行った先の農家で『家の光』『キング』をランプの光で読みふけたことから目を悪くし、眼鏡をかけるようになる。

一九四五(昭和二十年) 一四歳

中学二年の時、敗戦を迎えた。戦争中閉鎖されていた図書館が解禁となり、図書部員となる。一級上に川田殖(哲学者)がいて、英文学中心の読書案内をもらった。小日向定次郎や斎藤勇の英文学史の輪読会にも参加。同じく一級上に高松雄一(英文学者)がいた。中二、中三の時には藁科雅美(音楽評論家)に英語をみてもらう。メゾソプラノ歌手の藁科夫人からは声楽を学んだ。

一九四六(昭和二十一年) 一五歳

年齢を偽って進駐軍の航空基地の雑役を志願。『リーダーズダイジェスト』やGI文庫を弁当箱に忍ばせて帰り読んだ。

一九四七(昭和二十二年) 一六歳

中学四年、網走にやってきた前進座の「真夏の夜の夢」(土方与志演出)を共産党に入りたての教師に引率されて観

る。最初のシエークスピア体験となる。その直後に、野村万作の「末広がり」の舞台も観劇。

一九四八(昭和二十三年) 一七歳

四月 旧制高校・仙台二校を受験。大雪のため受験会場に一時間遅れて到着して受験に失敗。

一九四九(昭和二十四年) 一八歳

高校三年の時、三ヶ月間博物館の中に下宿する。

一九五〇(昭和二十五年) 一九歳

三月 網走高等学校卒業。

四月 青山学院大学文学部仏文学科(夜間部)に入学。一学期のみ出席。

城北予備校に入り東大を目指す。展覧会巡りと古本屋回りの日々が続く。中学時代の恩師原田奈翁雄に誘われ、明治大学文学部で贗学生として渡辺一夫の講義を受ける。

一九五一(昭和二十六年) 二〇歳

東京大学文学部入学。早稲田大学文学部仏文科にも受かるが、授業料の安い東大に進む。同じ学年には石井進、石堂淑郎、井出孫六、松山俊太郎、三善晃、吉田喜重らがいた。大学の教養学部の授業にはほとんど出ず、日中は

画廊回り、夜は日比谷公会堂でイタリア歌劇、シゲテイ、ギーゼキング、ケンプなどを聴いていた。チケットは薫科雅美が毎日放送の音楽部長をしていた関係からフリーパスだった。音楽好きの歯医師さんから、フルート演奏を学ぶ（その後は、書家・比田井天来の息子海に学んだ）。毎週日曜日、午前中一時間半ぐらいは二紀会の画家・黒田頼綱のアトリエでクロツキー・デッサン、ヌード・デッサンを学んだ。

一九五三(昭和二十八年)年 一二三歳

高松雄一の妹(道子)が働いていた中原淳一のもとで楽譜の浄書のアルバイトをする。江戸川区小松川第二中学で、英語の先生が病気のため、三カ月ほどPTAのお雇いという形で臨時の英語教師を務める。

一九五四(昭和二十九年)年 一二三歳

三月 国史学科研究室でガリ版刷りの雑誌『国史研究室』を出すこととなり、第一号では編集長を務め「ミンシユウノナカヘ」を執筆。この文章がきっかけで歴史家石母田正と知り合う。以後数年間、石母田正の自宅で青木和夫、石井進、大隅和雄らと共に「万葉集」の講読会を行う。同時期、国文学者西郷信綱のもとでも二年間、『マルクス・エンゲルス文学芸術論』を読む会を行い、強い影響を受ける。この頃、遠山茂樹の『大太平洋戦争史』(五卷)東洋経済新報社の索引づくりをアルバイトで手伝う。

十月 池袋の舞台芸術院の卒業公演『十二夜』(土方与志演出)で三日間フルート演奏を担当。

十二月 『学友会報』第三号に「事はオペラに止まらない―我々の裡にある一つの弱さについて」を発表。

一九五五(昭和三十年) 二四歳

三月 東京大学文学部国史学科卒業。卒論「大江匡房―平安朝末期一貴族の意識」。卒論の指導教官は坂本太郎。

四月 麻布学園で日本史を教える(一六一年三月)。同僚に数学教師・北原和彦(作曲家)がいて、一緒に能楽堂に行ったり、昼休みは有栖川公園で音楽、詩、劇などについて語り合った。また麻布学園の生徒には川本三郎、山下洋輔、松田哲夫(筑摩書房)、山口昭男(岩波書店)がいた。

一九五六(昭和三十一年) 二五歳

一月 坂上ふさ子と結婚(十日)。石井進との共同執筆で林屋辰三郎『古代国家の解体』の書評を『史学雑誌』に掲載。

九月 荒木良雄・茂山千之丞『狂言』の書評を『文学』に掲載。

一九五七(昭和三十一年) 二六歳

四月 東京都立大学大学院入学、社会人類学専攻。教授に岡正雄、馬淵東一、古野清人、西村朝日太郎、松平齊光、鈴木二郎らがいた。

七月 東京都教育委員会主催の北部伊豆諸島文化財総合調査団に参加。新島若郷村落を岡正雄の指導の下に、村武精一、郷田洋文、常見純一と共に調査。

一九五八(昭和三十三年) 二七歳

十月 村武精一との共同執筆で「文化人類学の研究動向」を『思想』に掲載。

一九五九(昭和三十四年) 二八歳

五月 「天皇はいぜんとして象徴である」を『日本文学』に掲載。

一九六〇(昭和三十五年) 二九歳

三月 修士論文「アフリカ王制研究序説」を提出。論文の清書は石井進、大隅和雄、野口武徳が行った。

四月 東京都立大学大学院の博士課程に進む。この頃、国際基督大学非常勤助手となる。この時の学生に大塚信一(岩波書店)、渡辺勝夫(講談社)がいた。

六月 「子供のためのマンガから―独断的俗悪マンガ論」を『日本文学』に掲載。

十二月 「未開社会における歌謡」を『国文学―解釈と鑑賞』に掲載、寺山修司がこの論文に注目し「歌謡の古典」(『短歌』掲載)で取り上げた。

一九六一(昭和三十六年) 三〇歳

五月 「アフリカの造型―呪術Ⅱ宗教的背景」を『別冊みづゑ』に掲載。

八月 蒲生正男の紹介で柳田国男に会う。

十二月 ジャック・ブリアール著『青銅時代』を翻訳し、文庫クセジュから出版。

一九六二(昭和三十七)年 三二歳

九月 アンリ・ラブレ著『黒いアフリカの歴史』を翻訳し、文庫クセジュ(白水社)から出版。

十月 「柳田に弟子なし―若き民俗学徒への手紙」を『論争』に発表。

一九六三(昭和三十八)年 三三歳

三月 「アフリカにおける身分と階級―アフリカにおける奴隷関係の諸形態」を『古代史講座第7巻 古代社会の構造(下)』学生社に掲載。

六月 長男類児誕生。

七月 ユベール・デュシャン著『黒いアフリカの宗教』を翻訳し、文庫クセジュから出版。

八月 「徒党の系譜」を森秀人が編集していた『思想の科学』に発表。

九月 「アマチュアの使命」を『思想の科学』に発表。

十月 西アフリカ、ナイジェリアのイバダン大学社会学講師となる(一六四年六月)。

十二月 「西アフリカにおける王権のパターン―比較研究の試み1」を『アフリカ研究』に掲載(2は翌年三月に掲載)。

一九六四(昭和三十九)年 三三歳

十月 「イバダン大学生の夢と関心―海外からの手紙・ナイジェリア」を『展望』に掲載。

一九六六(昭和四十二年) 三五歳

三月 「文化の中の「知識人」像―人類学的考察」を『思想』に発表。

四月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にアフリカ研究部門講師として勤務。

六月 次男拓夢誕生。

十一月 アフリカ調査に出発。

一九六七(昭和四十二年) 三六歳

四月 アジア・アフリカ言語文化研究所アフリカ研究部門助教授に昇任(十六日)。

一九六八(昭和四十三年) 三七歳

三月 ナイジェリア調査の帰途、パリに立ち寄る。オデオン通りの人類学・言語学関係の書店「パンセ・ソヴァール」を訪れ、店主に人類学者ダン・スベルベルを紹介される。さらにダンからはロジェ・マルタン・デュ・ガールの孫で人類学者のダニエル・ド・コツペを紹介される。当時パリに滞在していた中村雄二郎に連絡を取り初めて会う。

四月 帰国(二十七日)。

八月 「アフリカの知的可能性」を岩波講座『哲学第13巻 文化』岩波書店に掲載。

九月 京都国際会議場での第八回国際人類学・民族学会議に参加、アフリカ部門で報告。

十月 埼玉大学の川田順造から病気の石田英一郎に代わって「人類学思想史」を担当してほしいと頼まれる。この時の学生に小松和彦がいた。

一九六九(昭和四十四)年 三三歳

一月 「文化と狂気―ホモ・デリルス」を『中央公論』に掲載。「道化の民俗学」を『文学』に連載開始(八月)。
吉本隆明『共同幻想論』の書評を『日本読書新聞』に八回に亘り連載。

二月 平凡社の「現代人の思想」シリーズの第十五巻『未開と文明』を編集し、出版。解説として「失われた世界の復権」を執筆。

九月 第一回アフリカサヴァンナ地帯調査団の一員としてエチオピア調査を担当(七〇年三月)。調査地域はエチオピア南西部のガム・ゴファア州及びスーダンに接するイルヴァポール州。実地調査をマスケート族(マスケート村)で集中して行った他、ハイレセラシエ大学エチオピア研究所での文献蒐集を行う。

一九七〇(昭和四十五年) 三九歳

六月 「本の神話学」を『中央公論』に連載開始(七一年二月)。

九月 「蘇るアメリカ・インディアンと道化の伝統―境界・禁制・侵犯」を井上光晴が編集していた雑誌『辺境』に掲載。

十月 日本アフリカ学会第七回学術大会に参加。

十二月 パリ大学第十分校（ナンテール）人類学科客員教授。前任者ピエール・クラストルの後を受け、「政治の象徴人類学」についての講義を行う（七二年六月）。

一九七二（昭和四十六）年 四〇歳

一月 『アフリカの神話的世界』岩波新書を出版。

二月 「林達夫のフォークロア世界」を『林達夫著作集五 政治のフォークロア』平凡社、付録「研究ノート五」に掲載。

三月 『人類学的思考』せりか書房を出版。

七月 『本の神話学』中央公論社を出版。

九月 エコール・プラティーク・デ・ゾート・ゼチュードの客員教授。

十一月 「Yukun 族 (Nigeria) のウィッチクラフト起源神話の比較形態論的考察」を『アジア・アフリカ言語文化研究』に、「第三世界」における歴史像―行為としての歴史」を岩波講座『世界の歴史 別巻』岩波書店に掲載。

一九七二(昭和四十七年) 四一歳

一月 エコール・プラテイクでのレヴィストロースのゼミで「ジユクン族の王権と二元的世界観」を発表。このときの参加者には、ド・コッペ、モーリス・ゴドリエ、ピエール・ブルデューなどがいた(十九日)。ロジェ・カイヨワの依頼で“La royauté comme système de mythe : un essai de synthèses”を“Diogenes”に掲載。

四月 レヴィストロースのゼミで西アフリカの瓢箪の模様に関する分析を発表。帰国。「〈見世物〉と映像文化」文化史の中に映画をときはなつためのひとつの試み」を『フィルム』に掲載。

七月 「王子の受難—王権論の一課題」を『現代諸民族の宗教と文化—社会人類学的研究 古野清人教授古稀記念論文集』社会思想社に掲載。

八月 北海道檜山管内高等学校教育研究会にて「自然と文化」を講演(十七日)。

九月 東京銀座「浜作第二店」で林達夫、古野清人と鼎談(二十六日)。

十二月 「バスター・キートンの宇宙誌—キートン將軍」をめぐって」を『フィルム』に掲載。

一九七三(昭和四十八年) 四二歳

一月 「柳田・折口における周辺の現実—民俗学と人間科学」を『國文學—解釈と教材の研究』に掲載。

二月 “La structure mythico-théâtrale de la royauté japonaise”を塙嘉彦が編集を担当した“Esprit”日本特集号に掲載。

三月 「歴史・祝祭・神話」を『歴史と人物』に掲載。

五月 「道化的世界」を『展望』に掲載。

六月 アジア・アフリカ言語文化研究所教授に昇任(二日)。「道化と詩的言語」および井上ひさしとの対談「近代日本の道化群像―祝祭空間の成立へ向けて」を『ユリイカ』に掲載。

七月 オックスフォードで行われたイギリス社会人類学協会(A S A)の創立十周年記念大会に参加、「天皇制の神話―儀礼的構造」を報告。その後もウォートン・カレッジに止宿し、読書、本蒐め、ディアギレフ関係の資料集め(モシユレアム美術館)を行い、バムブリー通りの社会人類学研究所でオックスフォード人類学の創立者マレットの寄贈になるマレット蔵書などの本を読む。ロンドン大学ワールブルク研究所を訪れ、エルンスト・ゴンブリッチに研究所内を案内してもらふ。「エイゼンシュテインの知的小宇宙―エイゼンシュテイン論覚え書」を『芸術倶楽部』に掲載(八月)。

十一月 ニューヨーク、シラキューズで行われたアフリカ研究協会年會合にて “Jukun Trickstar Cycle” を発表。

一九七四(昭和四十九)年 四三歳

五月 「エリック・サティとその世界―二〇年代のアルケオロジー」および高橋悠治との対談「徴発としての芸術―エリック・サティと現代」を『ユリイカ』に掲載。

六月 『道化の民俗学』新潮社を出版。

七月 『歴史・祝祭・神話』中央公論社を出版。

八月 東インドネシア調査に赴く(七五年十月)。四カ月間ブル島で予備調査した後、チモール島、フロレス島で

調査を行う。

九月 「ミシユレあるいは歴史の宴」を『歴史と人物』に掲載。ジョージ・スタイナーとの対談 “In Search of Cultural Identity - A Happy Loss of Time with George Steiner by Masao Yamaguchi” を『英語研究』に掲載。ポール・ラディン、カール・ケレーニイ、カール・グスタフ・ユング著、皆河宗一、高橋英夫、河合隼雄訳「トリックスター」晶文社に解説「今日のトリックスター論」を掲載。“La royauté et symbolisme dualiste chez les Jukun de Nigeria” を『アジア・アフリカ言語文化研究』に掲載。

一九七五(昭和五十年) 四四歳

一月 渡辺守章との対談「神々の根」を『國文學—解釈と教材の研究』に掲載。

五月 哲学叢書の一冊として『文化と両義性』岩波書店を出版。

六月 『道化的世界』筑摩書房を出版。

十一月 「地揺れする辺境から—チモールからの手紙」を『中央公論』に掲載。

十二月 「南海に日本文化の起源を探る」を『図書』に掲載。「女性この「存在論的他者」—ジンメル「異人論」中心に」を朝日新聞夕刊に掲載。大岡昇平によれば、これが戦後初のルイーズ・ブルックス論。アジア・アフリカ言語文化研究所のプロジェクト「アジア・アフリカの象徴と世界観」で「リオ族の騒音と儀礼」を報告。

一九七六(昭和五十二年) 四五歳

一月 「思想76」を『中央公論』に連載開始(十二月)。

二月 大江健三郎、谷川俊太郎との鼎談「現代世界と文学表現」を『世界』に掲載。この鼎談がきっかけとなり、大江健三郎、中村雄二郎、多木浩二、埴嘉彦、大塚信一らと月一回の研究會「例の會」が始まる(やがて前田愛、市川浩、河合隼雄、三浦雅士らも加わって「都市の會」に發展)。

三月 高階秀爾との対談「文化を解読する—絵画と精神史の古層」を『現代思想』(青土社)に掲載。

四月 ブラウン大学での「東欧記号論国際シンポジウム」に参加、「The Applicability of the Concept of Ostranenie in the Study of Culture in Anthropology」を報告。ウィリアム・ビーマンと知り合う。MITを訪れ、ローマン・ヤコブソンと対談(二十二日)。

六月 パリでの人間科学研究センター主催のシンポジウム「東インドネシアにおける社会構造・家屋・宇宙観」に参加。クロード・レヴィ・ストロースと対談(二十八日)。

六月 田淵安一との対談「象徴の森の中へ—芸術と文化人類学」を『現代思想』に掲載。

七月 ミッシェル・ド・セルトーとパリで対談。高階秀爾、中村雄二郎との書評鼎談「共同討議 書物の世界」を『現代思想』に連載開始(七七年七月)。間宮芳生との対談「原型の音楽行動」を『あんさんぶる』に掲載(九月)。

八月 来日したヤン・コットと対談。種村季弘との対談「映画神話の構造」を『ユリイカ』に掲載。

十月 東京竹橋、パレスサイドビルの「アラスカ」で林達夫、大江健三郎と鼎談(二十二日)。

十一月 対談シリーズ「二十世紀の知的冒険」を『世界』に連載開始(七七年五月)。第一回はローマン・ヤコブソン

ンとの対談「二十世紀の知的青春」。「道化の宇宙」を『朝日ジャーナル』に連載開始（七七七年五月）。金沢大学国文学科の大学院で集中講義「中世紀行文学の宇宙像」を行う。

十二月 「歴史人類学或いは人類学的歴史学へ―ジャック・ル・ゴフの「歴史学と民族学の現在」をめぐって」を『思想』に掲載。

一九七七（昭和五十二年） 四六歳

一月 レヴィルストロスとの対談「人間科学の新たな地平」を「二十世紀の知的冒険」の第三回目として『世界』に、後藤明生との対談「失われた喜劇を求めて」を『早稲田文学』に掲載。

四月 東京竹橋「アラスカ」で林達夫、中村雄二郎と鼎談（二日）。日本語で書かれた初のアフリカ通史となった『世界の歴史第六巻 黒い大陸の栄光と悲惨』講談社を出版。

五月 東京銀座「浜作第二店」で、林達夫、大江健三郎と鼎談（六日）。

七月 「コラーージュとしての伝記」を『海』に、「文化における中心と周縁」と、磯崎新、一柳慧、井上ひさし、大江健三郎、大岡信、鈴木忠志、高橋康也、武満徹、東野芳明、吉田喜重との座談会「文化の活性化を求めて」を『世界』に掲載。

八月 ビーマンの誘いでイラン、シラーズ国際芸術祭の「即興演劇の伝統シンポジウム」に参加、「滑稽劇の伝統―比較の視点」を報告。

九月 「ヴェデキント「ルル」についての神話批判の前提となるようないくつかの覚え書き」を『新劇』に掲載。

川田侃（上智大学国際学部）に誘われ、エル・コレヒオ・デ・メヒコ（メキシコ大学院大学）に客員教授として赴任。日本文化講座を担当。メキシコでの「国際文化交流・海外子女教育シンポジウム」に参加。

十月 「文化記号論研究における「異化」の概念」を『思想』に掲載。

十一月 「文化史の盲点―イラン道化紀行」を『海』に掲載。

十二月 メキシコでオクタビオ・パスと対談（二十一日）。

一九七八（昭和五十三年） 四七歳

二月 「小林秀雄『本居宣長』を読む」を『中央公論』に掲載。

三月 吉田喜重を同行し、メキシコシテイ西北部の辺地に住むコーラ族の祭りを調査（二十一日～二十四日）。ペルー大学で特別講座を担当（二十九日～三十一日）。オクタビオ・パスとの対談「詩・エロス・宇宙―一九七七年十二月二十一日メキシコ・シテイにて」を『海』に掲載。

四月 『知の遠近法』岩波書店を出版。

七月 エル・コレヒオ・デ・メヒコで開催された「第一回 中・南米、アジア、アフリカ研究集会」の部会「歴史のもう一つの潮流」で報告。

八月 吉田喜重との対談「開かれた冥界」を『世界』に掲載（九月）。

十月 アルド・チッコリーニとの対談「祝祭としての音楽―チッコリーニとサテイを語る」を「音の彼方に神話を語る声を聴く」の第4回目として『レコード芸術』に掲載。

一九七九(昭和五十四)年 四八歳

一月 白土三平との対談「混沌の現代には原始人間と神話世界の構造がある」を『週刊ポスト』に掲載。「日本民俗文化体系第八巻 石田英一郎〈河童論〉」講談社を出版。

二月 「オクタビオ・パスと歴史の詩学」を『思想』に掲載。「オクタビオ・パスと文化記号論」、インタヴュー「記号論と開かれた人間科学への道」(聞き手・三浦雅士)を『現代思想』に掲載。

三月 三浦雅士による『現代思想』臨時増刊号「一九二〇年代の光と影」のためのインタヴューを京王線の車中で受ける(十六日)。国際交流基金の招きで来日したマリオ・バルガス・ジョサと対談(十六日)。ペルー、リマのカトリック大学で講義を行う。

五月 中村雄二郎との対談「イカロスの悪夢―歴史と歴史記述」を『現代思想』に掲載。

六月 イスラエルのテル・アビブ大学とエルサレム大学で開催された「文学記号論シンポジウム」に参加。インタヴュー「一九二〇年代へ向けて」(聞き手・三浦雅士)を『現代思想』に掲載。

七月 バルガス・ジョサとの対談「ラテン・アメリカの文学と知的伝統」を『世界』に掲載。

八月 バリ島へのグループ旅行に、井上ひさし、大江健三郎、清水徹、高橋康也、中村雄二郎、原広司、吉田喜重、渡部守章と共に参加。紀南文化財研究例会で南方熊楠について講演(十二日)。

十月 ニューヨークにてウンベルト・エーコと対談。「南方熊楠と文化人類学」を『くちくまの』に掲載。

十二月 原広司との対談「空間へのフットワーク―住居のコスモロジー」を『建築文化』に、「文化とその痛み」

を現代研究会で出している『現代セミナー』シリーズの第10巻に掲載。

一九八〇(昭和五十五年) 四九歳

二月 インディアナ大学記号研究センターと東アジア研究科共催の講演会で『源氏物語』について講演。「続二十世紀の知的冒険」を『世界』に連載開始(八月)。第一回はウンベルト・エーコとの対談「開かれた記号論へ」。

四月 対談集『二十世紀の知的冒険』岩波書店を出版。

七月 『道化の宇宙』白水社を出版。

十月 朝日カルチャーセンターでの講座「記号としての世界」の立案を担当、第一回目(二日)の「記号論の拡がり」を講義。「イエスの箱舟」の記号論―マス・メディアと関係の構造的性について」を『世界』に掲載。

十一月 ニューヨーク大学演劇学科で講義を行う。ソーホーでメレディス・モンクと対談。

十二月 ワシントンで行われたアメリカ人類学会に出席。ヴィクター・ターナー、ロベルト・ダ・マータ、バーバラ・マイヤー・ホフらとの雑談の中でシンポジウム「見世物と民衆娯楽の人類学」を日本で開催することになる。ニューヨークのブック・アンド・カンパニー書店でモーリス・センダックと出会う。共同研究「文化の中の排除(スケープゴート)の原則」の打合せのためパリを訪れる。アラン・ジュフロワにガルシア・マルケスを紹介される。「ヴァルネラビリティについて―潜在的凶器としての「日常生活」」を『中央公論』に掲載。

一九八一(昭和五十六年) 五〇歳

一月 パリ大学第七分校の研究室でジュリア・クリステヴァと対談。「ジユクン族の世界観の中の女性」をシンポジウム「文化の中の排除の原則」で報告。

四月 青山学院大学で行われた第一回日本記号学会大会のシンポジウム「仮構と反転」で司会を務める(二十五日)。

五月 武満徹の「今日の音楽」シリーズで「音楽の二〇年代」の企画・構成を担当(三十日)。「スカートのなかの宇宙」を『中央公論』に、インタヴュー「なぜいまメタファーか」(聞き手・三浦雅士)を『現代思想』に、メレディス・モンクとの対談「深層の演劇」を『新劇』に掲載。

七月 来日したジョフリー・E・R・ロイドと長野県佐久市の川田殖郎で対談。「劇空間・万華鏡」を『新劇』に連載開始(八七年九月)。「精神医学と人間科学の対話」を『中央公論』に、アラン・ジュフロワとの対談「危機の中の知識人」を『世界』に、インタヴュー「構造とテキスト」(聞き手・三浦雅士)を『現代思想』に掲載。

八月 寺山修司と対談(十一日)。唐十郎と対談(十七日)。早稲田小劇場利賀山房公演でのシンポジウムに参加(二十八日)。鈴木忠志と対談(二十九日)。筑波大学における国際シンポジウム「見世物と民衆娯楽の人類学」の実行委員を担当(三十一日~九月三日)、このシンポジウムで「相撲の宇宙論」を報告。

九月 クリステヴァとの対談「記号の生成」を『海』に、G・E・R・ロイドとの対談「古典研究と人類学」を『思想』に、インタヴュー「権力のコスモロジー」(聞き手・三浦雅士)を『現代思想』に掲載。叢書『文化の現在第10巻 書物―世界の隠喩』岩波書店を編集し、「書物という名の劇場」を掲載。

十月 寺山修司との対談「劇の出現」、唐十郎との対談「魔について」および鈴木忠志との対談「知の劇場へ―早

稲田小劇場・利賀山房での対話」を『現代思想』に掲載。

十一月 多摩市公民館で市民大学講座の講師を務める。関西大学院主催の院祭講演会で「文化とパフォーマンス」を講演（七日）。ウィリアム・ビーマンと対談（十日）。東京大学駒場三十周年記念シンポジウムに参加（十四日）。東京外国語大学大学祭で「文化と祝祭」を講演（十九日）。京都芸術短期大学で「東インドネシアの風土と文化」を講演（二十日）。「政治の象徴人類学に向けて」を叢書『文化の現在第12巻 仕掛けとしての政治』岩波書店に掲載。

十二月 「地方演劇祭についての日仏シンポジウム」に参加（二日）。武蔵野美術大学で「文化の中のデザイン」を講演（二日）。ウィリアム・ビーマンとの対談「ガースユインまたは街路の詩法」を『ユリイカ』に掲載。栗本慎一郎、宮田登との鼎談「広告の博物誌」をカルビーのPR誌『Harvester』に掲載。

一九八二(昭和五十七)年 五一歳

一月 愛知県北設楽郡東栄町で花祭りを見学。エッソ石油のPR誌『エナジー対話』のため渡辺守章と湯河原で対談。

二月 対談集『知の狩人―続・二十世紀の知的冒険』岩波書店を出版。

四月 山下洋輔トリオ・コンサートで「ジャズ大名」の演奏に筒井康隆（クラリネット）と共にフルートで参加（十七日）。「ブレヒトとガースユイン」コンサートを企画構成。

五月 品川文化会館でのサイコセラピー・セミナーで講演（八日）。ニューヨークで早稲田小劇場の「トロイアの女」の公演と連動して行われたシンポジウム「今日の日本演劇―早稲田小劇場」に参加、「日本における演劇の宇宙論

的次元」を報告。

六月 日本シェイクスピア協会第二十二回シェイクスピア夏期セミナーで講演(十九日)。

七月 前田愛との対談「舞姫」の記号学―その世界劇場性」を『國文學―解釈と教材の研究』に掲載。渡辺守章との対談を『エナジー対話 フランス』に掲載。

八月 スイス、ロカルノの国際映画祭に招待される。

九月 最高裁判所家庭裁判所調査官研修所で講演。『文化人類学への招待』岩波新書を出版。

十月 ニューヨークで行われたジャパン・ソサエティと総合研究開発機構主催のシンポジウム「メガロポリス―ニューヨークと東京」に参加、「文化テキストとしての東京」を報告。「シェイクスピア劇の中の王権・祝祭・道化」を『文学』に掲載。

十二月 「規範と逸脱」を『図書』に、大江健三郎との対談「原理としての子ども」を『海』臨時増刊「子どもの宇宙」に掲載。

一九八三(昭和五十八)年五二歳

一月 カリブ海予備調査(三月)。「展覧会カタログとのつきあいかた」を『アトリエ』に掲載。

二月 パリで行われたフランス文化省主催の会議「危機・文化・創造」に出席(十二月・十三日)。「スケープゴートの詩学へ」を『中央公論』に掲載。

三月 寺山修司との対談「身体を読む」を『ロアジール』に掲載。

五月 パリ社会科学高等研究院で「政治の象徴人類学」を講義。

六月 南仏のスリージー・ラ・サールでルネ・ジラルドを中心に行われた「スケープゴートについての国際シンポジウム」に参加、「Ver une poétique du bouc émissaire」を報告。ニューヨークのコネル大学でのシンポジウム「仏教と文学」に参加、「古代日本における仏教イデオロギーと文学伝統の形式―日本靈異記の場合」を報告。「家屋を読む―リオ族（インドネシア・フローレス島）の社会構造と宇宙観」を『社会人類学年報』第九巻、弘文堂に掲載。岩波現代叢書『文化の詩学』第I巻、岩波書店を出版。

七月 岩波現代叢書『文化の詩学』第II巻、岩波書店を出版。

十月 モントリオールとトロントの間にあるクイーンズ大学で開催された「ミハイル・バフチン国際シンポジウム」に参加、「Bakhtin and Symbolic Anthropology of Tomorrow」を報告。ヴィクター・ターナーとの共編で『見世物の人類学』三省堂を出版。

十一月 南米スリナム共和国でマロン系住民ジュカ族のトリックスター神話を採集（八四年二月）。インタヴュー集（聞き手・三浦雅士）『語りの宇宙―記号論インタヴュー集』冬樹社を出版。

十二月 エマニユエル・ルロワラデユリとの対談「歴史における局地性と普遍性」を『世界』に掲載。

一九八四(昭和五十九)年 五三歳

四月 日本民族学会会長に就任（一日〜八六年三月）。

五月 八王子大学セミナーで「足の記号論」を講演。

六月 パリの世界文化センターで行われたシンポジウム「演劇と生命科学」に参加。エディンバラでトリックスター・カンパニーの「マントウ」を見た後、パリに戻りシンポジウム「天皇制と日本文化」に参加。バリ島のガランガンの祭りを見学。バリ島で中上健次と対談（この対談の旅は以後、東京、富山県利賀村、韓国、熊野と続いた）。

八月 シアターアップルで行われた「さらば箱舟」公開記念イベントで座談会「さらば箱舟」をめぐって」に参加（二十四日）。

九月 フランス、ロワイヨールモンで国際演劇学会主催のシンポジウム「演劇・オペラ・見世物の記号学」に参加、「ルルの記号論的位相」を報告。

十月 早稲田大学演劇学科の韓国のシャーマン（ムーダン）調査に同行。週刊本『流行論』朝日出版を出版。

十一月 國學院大学百周年記念館公開学術公演会で講演。横浜市主催シンポジウム「都市環境と水」に参加。フランス国文学芸術オフィシエ賞受賞（十九日）。住谷一彦、坪井洋文、村武精一との座談会「異人その他」を読む」をIBMのPR誌『無限大』に掲載。「旅とトポスの精神史シリーズ」の一冊として『祝祭都市—象徴人類学的アプローチ』岩波書店を出版。

十二月 『朝日ジャーナル』愛読者招待シンポジウム「パフォーマンス・ナウ」に参加（九日）。アジア・アフリカ言語文化研究所のプロジェクト「アジア・アフリカの象徴と世界観」で「韓国のシャーマニズム」を報告。磯崎新、大江健三郎、大岡信、武満徹、中村雄二郎と共に『季刊へるめす』編集同人となり、創刊号を出版。創刊号には「地の精霊論1 ルルの神話学」を掲載。

一九八五(昭和六十年) 五四歳

一月 朝日カルチャーセンター・横浜での講座「仮面と人間」で「総論・仮面の文化人類学」を講演(十九日)。大岡昇平との対談「ルル」と昭和モダニズム」を『中央公論』に掲載。

二月 第9回ポケットパーク企画展「編集者がみたクリエイターの知的生産工具展」に出品(銀座ポケットパーク、十四～三月十二日)。

三月 前橋、煥呼堂主催の講演を行う(九日)。東大寺二月堂の修二会を観る(十二日)。石和町中央公民館成人式講座「遊・学イベントだ・だ・い・ま」で「文化という現在」を講演。NHK市民大学「文化人類学の視角」の講師を担当(～九月)。「ひとの棲処―インドネシア・フロレス島リオ族の場合」を『國學院大学日本文化研究所報』に掲載(～五月)。

四月 京都でのトランスパーソナル国際シンポジウムに参加。

五月 府中市大國魂神社の暗闇祭りに中村雄二郎、メリー・アイビー(アメリカの人類学者)と共に参加。インディアナ大学の記号学夏期講習で「スケープゴートの記号学」を講義(～六月)。シンポジウム「記号学と社会科学」に参加、「日本における負の空間」を報告。網野善彦との対談「歴史の想像力」を『思想』に掲載。

六月 「水と世紀末の文明」を『季刊へるめす』に、前田愛との対談「境界線上の文学―鏡花世界の原郷」を『國文學―解釈と教材の研究』に掲載。

七月 フランス、アルケスナンとデファンスで開かれた日仏文化サミット「創造とコミュニケーション」に参加。カリブ海セントビンセント島、セントルシア島で人類学調査(～八月)。

八月 中村雄二郎との対談「人類学と哲学の間」を『理想』に掲載。

九月 来日したマリー・シェイファーと対談。

十月 住谷一彦、坪井洋文、村武精一との座談会「『河童駒引考』を読む」を『無限大』に掲載。

十一月 東京日仏学院で「フランスの民族史とニューカレドニア・モーリス・レナールをめぐる」を講演（一日）。東京アメリカン・センターで行われた「インターリンク・フェスティバル'85」でのシンポジウム「文化のゆくえ―21世紀への展望」で司会を担当（十一日）。浅草で行われた毎日新聞社と台東区役所主催「下町国際シンポジウム―人間と都市」に参加。

十二月 立教大学英米文学科主催『ハックルベリー・フィンの冒険』刊行百年記念行事で講演（四日）。下野敏見（鹿児島大学）の種子島調査に同行（八六年一月）。マリー・シェイファーとの対談「音楽と土地の精霊」を『季刊へるめす』に掲載。

一九八六（昭和六十二年） 五五歳

一月 来日したアントニオ・ガデスと対談。

二月 阿部謹也との対談「歴史に音を聴く」を『思想』に掲載。

三月 来日したリンゼイ・ケンプと対談を行う。「神話的世界としての『ハックルベリー・フィンの冒険』」を『季刊へるめす』に、インタヴュー「思想のパフォーマンス」（聞き手・小松和彦）を『現代思想の饗宴』に掲載。

四月 シチリア、パレルモでの国際記号学会常任理事会、シンポジウム「記号学教育の現状」に参加。日仏会館・

朝日新聞社主催のシンポジウム「今、フランス文化とは？」に参加（十七日）。早稲田大学生協主催の「新学期ライブ・春はさくらの屋台書店」で「祝祭書店」の店主を務めた後、シンポジウム「大学生と読書」に参加（十八日）。パルコで行われた「セツノグラフィ」のイベントで朝倉撰と対談（十八日）。「門外漢のシエークスピア―そのカーニヴァル性をめぐって」を『文学』に掲載。

五月 広島大学総合科学部で開催された日本民族学会第二十四回研究大会で「二〇世紀における知の行方」を講演（二十三日）。

六月 アントニオ・ガデスとの対談「身体の幾何学―フラメンコと文化のアイデンティティ」を『季刊へるめす』に掲載。

八月 ミヒエル・エンデとの対談をNHK教育テレビ「ETV8」で放映。

九月 大阪大学工学部環境工学科で「都市における水と音」を講演。『文化人類学の視角』岩波書店を出版。

十月 モスクワで行われたゴスキノ（ソ連邦国家映画委員会）とNHK、日本映像記録共催の「ソ日民族誌映像祭」に参加。ヴィアチエスラフ・イワノフと対談（十一日）。住谷一彦、坪井洋文、村武精一との座談会「『忘れられた日本人』を読む」を『無限大』に掲載。

十一月 シネ・ヴィヴァン六本木にてダニエル・シユミットについて講演。

十二月 ピーター・ブルックとの対談「演劇の始源に向けて」を『季刊へるめす』に掲載。

一九八七(昭和六十二年) 五六歳

二月 ジョン・ケージとの対談「音楽、人生、そして友人たち」を『季刊へるめす』に掲載。

三月 「相撲における儀礼と宇宙」を『国立歴史民俗博物館研究報告』に掲載。

四月 福井県、滋賀県、富山県の民俗民俗調査(五月)。

五月 「情報透視図」を『本』に連載開始(八八年八月)。

六月 日本エルメス社・朝日新聞主催のエルメス社二百年記念シンポジウム「伝統二十一世紀の技術」の総合司会を担当。フィラデルフィアの国際演劇シンポジウムに出席、ムーヴメント・シアター・インターナショナル主催「道化についての国際シンポジウム」に参加、部会「道化と社会」で座長を務める。ポーランド、ルブリン市でのシンポジウム「演劇における声」に参加、「日本の伝統演劇における非分節言語」を報告。イワーノフとの対談「グラスノスチ」のなかの記号論」を『季刊へるめす』に掲載。

七月 日本余暇研究センター主催のシンポジウム「余暇の文化人類学」に参加。ベルギー、ルーバンのカトリック大学の夏期セミナーで「笑いの記号学」を講義。『知のルビコンを超えて―山口昌男対談集』人文書院を出版。

八月 千石、三百人劇場で行われた「メキシコ時代のルイス・ブニユエル」関連イベント「メキシコを知る、ブニユエルを知る講演会」で講演(二十九日)。

十二月 国際シンポジウム「医療人類学の可能性―21世紀の医療とその展望」に参加(十三日)。

一九八八(昭和六十二年) 五七歳

二月 GKデザイン研究所で行われた「オートバイ・デザインについてのシンポジウム」に参加、講演を行う。多木浩二、中村雄二郎との鼎談「脱領域の知性を讃えて―前田愛氏の仕事をどう継承するか」を『季刊へるめす』に掲載。

三月 調布グリーンホールでの日活撮影所主催「TRANSMEDIAⅢ『BUTOH』公演前夜祭シンポジウム 日本文化の国際化、そのなかでの舞踏」に参加。『季刊へるめす』に連載中の「知の即興空間」第六回として「折の昭和史―エノケンから甘粕正彦まで」を掲載。『学校という舞台―いじめ・挫折からの脱出』講談社現代新書 を出版。

四月 有楽町朝日ホールでのイベント、朝日ゼミナールジャパンスペシャル「揺れ動く国際社会・文明―変化期 ジャパンの選択」で司会を担当(十四日)。高橋亨との対談「枕草子、見えない回路」を『國文學―解釈と教材の研究』に掲載。

五月 明治大学で行われた第八回日本記号学大会で「ガイアとしての東京―流れとしての都市論」を講演(七日)。

六月 活水学院女子大学日本文学会で「日本文学史と文化人類学」を講演。フランスのアンテーヌ2(国営第二放送)からの依頼で日本のヤクザについての番組に出演。上智大学イスパニアセンター主催の国際シンポジウム「セルバテスと『ドン・キホーテ』」にて「『ドン・キホーテ』における文化と狂気」を講演(二十四日)。

七月 フィンランド、イマトラでの国際記号学センターの設立準備委員会に参加。共同通信のため多木浩二、天野祐吉と鼎談「戦争のグラフィズム」を行う。

九月 ハンガリー、ブダペストでの国際シンポジウム「伝統と革新」に参加、「日本文化における伝統とイノベーション」を報告。ワシントン、スミソニアン博物館でのシンポジウム「博物館展示の詩学と政治学」に参加、「日本文化の展示の詩学」を報告。「知の即興空間」第七回として「戦争と知識人——挫折の昭和史Ⅱ」を『季刊へるめす』に掲載。

一九八九(昭和六十四・平成元年) 五八歳

二月 品川、日本精工講堂での広告批評・O美術館主催「国際ユーモアCM会議 笑って、しゃべって、考える」に参加(七日)。

三月 ヴェネチア大学日本研究センターで講義を行う。アジア・アフリカ言語文化研究所長に就任(一九九二年三月)。「挫折の昭和史Ⅲ スポーツの帝国」を『季刊へるめす』に掲載(以後「挫折の昭和史」として一九九一年三月まで連載)。

四月 ポルトガル、ポルト市で国際記号学センターのシンポジウムに参加。スペイン、バルセロナでの国際記号学会に出席。

五月 日本大学で行われた第九回日本記号学大会で国際記号学会について報告(六日)。萩尾望都との対談「手塚治虫の壮大な世界観に私たちは酔った」を『DAYS JAPAN』に、住谷一彦、村武精一、宮田登との座談会「『稲を選んだ日本人』を読む」を『無限大』に掲載。

六月 水道橋、アビュラック・ミュージックコミュニティセンターで行われた「東西の地平——音楽祭Ⅲ」でのシンポジウム「ガムランの宇宙」に参加(四日)。札幌で行われたシンポジウム「少数民族の権利」に参加(二十六日)。

旭川市東川町で行われた写真記念シンポジウム「文化人類学と写真」に参加（二十七日）。石川歴史博物館の「昭和モダン展」オープニングで「地方都市とモダニズム」を講演（二十九日）。『知』の錬金術』講談社を出版。

七月 多摩市市民会館にて「多摩川」を講演（二十日）。「E・T・A・ホフマンの音楽と浪漫主義」を講演（二十二日）。

八月 札幌の北海道開拓記念館で「私の中の北海道」を講演（十三日）。川崎大師にて講演（二十日）。島根県庁主催のシンポジウムで宮田登と対談（二十八日）。横浜朝日カルチャー・センターにて「雅楽における音と宇宙像」を講演（二十九日）。

九月 広島デザイン博でのシンポジウム「スポーツと都市文化」に参加（二日）。名古屋大学教育学部主催の「M青年の事件のトポス」にて「事件の人類学」を講演。世界デザイン博との関連で若山滋と公開対談「日本の都市文化の仮説Ⅱ屋台性」を行う。

十月 パルコ劇場で行われたシンポジウム「千利休をめぐる―自分探し、他人探し」に参加（二日）。ドイツ文化会館で行われたシンポジウム「戦後ドイツの音楽と文学」に参加。『古典の詩学―山口昌男国文学対談集』人文書院を出版。

十一月 鶴屋南北没後百六十年記念シンポジウム「明日の南北劇をさぐる」に参加（二十七日）。

十二月 『知の即興空間―パフォーマンスとしての文化』岩波書店を出版。

一九九〇（平成二年） 五九歳

一月 来日したポール・ブレイサックと対談を行う（十二日）。

- 三月 ミラノのドムス・アカデミーにて「トリックスターとデザイン」をイタリア語で講演（十九日）。
- 七月 イタリア、ボローニアで開催されたシンポジウム「パフォーマンス技術と史料編集」に参加。
- 八月 国際交流基金の招きで来日したウンベルト・エーコと対談。
- 九月 へるめす編集同人に呼びかけウンベルト・エーコと座談会（七日）。日本オリンピック委員会主催の「ジャパン・オリンピック・フォーラム」に参加（十二日）。哲学堂講演会で「大正期における芸術とスポーツ」を講演（十六日）。
- 十月 東京国際演劇祭プログラム代表委員を務める（十二月）。来日したツヴェタン・トドロフと対談（十八日）。
- 十二月 来日したルー・ハリソン（作曲家）と対談（七日）。『病の宇宙誌』人間と歴史社を出版。

一九九一（平成三年） 六〇歳

- 一月 「異形性の文学―隆慶一郎の世界」を『群像』に、ウンベルト・エーコ、磯崎新、武満徹、中村雄二郎との座談会「U・エーコをかこんで―日本の印象」を『へるめす』に掲載。
- 二月 ロサンゼルスのパール・ゲッツィ・センター主催のシンポジウム「通文化パフォーマンス」に参加。
- 三月 ウンベルト・エーコとの対談「知のクライシス―批判する力のために」を『国際交流』に掲載。
- 四月 東京大学で「大正文化の諸問題」を講義。
- 五月 国立民族学博物館で行われた大学院大学年次合同セミナーで「環境問題と文化人類学」を講演（十一日）。
- ルー・ハリソンとの対談「私はキャンディ・ショップに入った子供みたいだ」を『へるめす』に掲載。
- 六月 「異人としての手塚治虫」を『SPY』に掲載。

八月 全国と高等学校「倫理」「現代社会」研究会にて「国際文化と文化人類学の課題」を講演。

九月 ベルリンで行われた欧州日本研究者会議に出席。人類学部会「日本文化と遊戯」にて“Karakuri: the Ludic Relationship between Man and Machine in Tokugawa Japan”を報告。「文化装置としての百貨店の発生」を『へるめす』に掲載（十月）。

十月 伊藤昌世写真展「同心円東京」（ガーデン・ガーデンにて開催）のトークショーで橋口譲二と対談。テニス山口組の合宿を福島県昭和村で行い、地元の喰丸小学校が廃校、取り壊しとなることを知る。喰丸小学校に魅了され校舎取り壊しに反対、後に文化再学習センターとして再出発させるまでに漕ぎつける。来日したヘニング・アイヒベルグと対談を行う（三十一日）。

十二月 日航財団主催の「世界航空文明デザイン会議」に参加（十二日）。

一九九二(平成四年) 六一歳

一月 「淡島椿岳・寒月父子の場合」を『へるめす』に掲載（二月）。

三月 長寿社会開発センター主催の「生きがい探しのシンポジウム—五十歳からの選択」で司会を務める（十五日）。

四月 ヘルシンキ大学での日本音楽週間で講演を行う。

五月 中国新聞創刊一〇〇周年記念シンポジウム「21世紀型都市—広島」文科会B「魅力ある都市と祭典」でコーディネーターを務める（二十五日）。

七月 「敗者の精神史序説」を『へるめす』に、「立秋」の俳諧的小宇宙—健堂・瓊音・未醒」を『季刊文学』掲載。

八月 福島県喰丸小学校にて喰丸文化再学習センターを開所。喰丸文化再学習センターで井上ひさしと対談（十三日）。来日した白樺（バイホア）をインタヴュー（二十六日）。

九月 電通総研での「経営の精神文化史研究会」発足に尽力し、この月第一回目の研究会が持たれる。「敗者への想像力」を『へるめす』に掲載。

十月 福島県喰丸小学校にて「喰丸お月見」講座を開講（九・十日）。「歌舞伎・からくり・身体」を『國文學―解釈と教材の研究』に掲載。

十一月 神田古書会館での古書展で『集古』の揃いを買う。目黒区下目黒住区センターで古書店主向けの講演会を行い、高橋徹（月の輪書林）と出会う（七日）。「明治出版界の光と闇―博文館の興亡」、井上ひさしとの対談「主人公は木造校舎―いま、なぜ昭和村か」、白樺インタヴュー「白樺さん、文学的ルーツを語る―一九三〇年代から一九四五年頃まで」を『へるめす』に掲載。

一九九三（平成五年） 六二歳

一月 沖縄県那覇市パシフィックホテル・沖縄で行われた日本スポーツ産業学会第二回学会にて「文化とスポーツ」を講演（二十一日）。「青い眼をした人形と赤い靴はいた女の子の行方―日米関係のアルケオロジー」を『へるめす』に掲載。

二月 経営の精神文化史研究会で「小林一三と宮武外骨」を発表。インタヴュー「宮沢賢治の祝祭空間」を『宮沢賢治』に掲載。

三月 「二つの自由大学運動と変り者の系譜」を『へるめす』に掲載。

五月 丸善本の図書館講演会にて「図書館人の精神史」を講演(四日)。「大正日本の「嘆きの天使」——吉野作造と花園歌子」を『へるめす』に掲載。

八月 福島県喰丸小学校にて「喰丸の夏」講座を開講(十八、二十日)。

九月 「小杉放庵のスポーツ・ネットワーク」を『へるめす』に掲載(十月)。

十月 高崎哲学堂講演会で「木造公共建築の思想」(九日)を、桐蔭メモリアル・ホールで「音楽の中の道化」を講演(十三日)。国立民族学博物館特別研究「二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容」のシンポジウムに参加、講演を行う(三十一日)。この月、経営の精神文化史研究会で「神戸の西村旅館」を発表。

一九九四(平成六年) 六三歳

一月 「穢い絵」の問題——大正日本の周縁化された画家たち」を『へるめす』に掲載。

二月 愛知県文化情報センター主催のイベントトーク「身体というノスタルジア」に出演(二十三日)。

三月 アジア・アフリカ言語文化研究所を定年退職。「西国の人気者——久保田米僊の明治」を『へるめす』に掲載。

落合一泰との共同執筆 “Mundo al Revés : Cultura Carnavalesca de los Altos de Chiapas, México” を『アジア・アフリカ言語文化研究』に掲載。

四月 静岡県立大学大学院国際関係学研究科教授に就任。NHK衛星第二放送「世界・わが心の旅」に出演。

五月 東京外国語大学名誉教授となる。「幕臣の静岡——明治初頭の知的陰影」を『へるめす』に掲載。

- 六月 バークレイで行われた国際記号学会で「東アジアの風水論の記号論的側面」を発表。
- 七月 フランス国パルム・アカデミック賞受賞(二十六日)。
- 八月 福島県喰丸小学校にて「紙芝居の市」を開講(十六、十八日)。井上ひさしとの対談「親子は最初のネットワーク」を『ノーサイド』に掲載。
- 十一月 日本有権者連盟例会で「再生へもうひとつの視座」を講演。

一九九五(平成七年) 六四歳

- 一月 「内田魯庵の不思議―(失われた日本) 発掘」を『群像』に連載開始(一九八八年三月)。
- 三月 名古屋、栄ガスホールにて「記憶と歴史―記憶という視点から歴史を切る」講演(十二日)。「明治・大正・昭和初期における知の円環―雑誌「集古」をめぐる」を静岡県立大学国際関係学部編『国際関係学双書12 課題としての日本』静岡県立大学国際関係学部に掲載。『挫折』の昭和史」岩波書店を出版。
- 五月 池内紀との対談(坪内祐三司会)「散歩と釣りと雑学が読書名人への王道だ」を『ノーサイド』に掲載。
- 六月 リスボンでの東チモール島シンポジウムに参加。
- 七月 『敗者』の精神史』岩波書店を出版。
- 十月 経営の精神文化史研究会で「矢野二郎」を発表。
- 十一月 静岡県立中央図書館創立七十周年記念特別講演講演会にて「書物と静岡」を講演(二十七日)。
- 十二月 インド西ベンガル州にある日本学院にて「タテ社会からヨコの社会へ」「書道の芸術と差別の構造」「相撲

と日本文化」のシリーズ講演を行う。インド人類学局で「今日の日本社会と文化」を講演。

一九九六(平成八年) 六五歳

八月 平成八年大学ガイダンスセミナーにて「まぼろしの大学」を講演。

九月 「藤沢遊行フォーラム―中世・時衆の世界」にて「寺と宇宙―遊行寺の一灯会のメッセージ」を講演(九月)。'96北海道で行われた第一回レール・フォーラムに参加(二十三・二十四日)。

十月 上海復旦大学での日中學術シンポジウム「追儼劇と能の起源」に参加。『敗者』の精神史』で第23回大佛次郎賞受賞。立命館大学文学部人文総合科学インスティテュート開設記念連続講演会第一回で「近代日本の知のネットワーク―西園寺公望にふれながら」を講演(二十七日)。

十一月 淑徳大学の公開講座で「宮澤賢治とアニミズムの世界」を講演(一日)。来日したフランス、シラク大統領との昼食会に出席(二十日)。沖縄県立芸術大学にて「宮沢賢治と音楽」のテーマで集中講義。

十二月 「現代に生きる」を『報知新聞』に連載(一九九七年五月)。

一九九七(平成九年) 六六歳

三月 マーシャル・ブロンスキの依頼により、ニューヨークで行われたニュースクール・フォー・ソーシアル・リサーチとコロンビア大学建築学部主催のシンポジウム「四十二丁目とタイムズスクエアの再開発」に参加(四・七・八日)。吉野作造記念館にて「吉野作造と街角のアカデミー」を講演(十六日)。

四月 札幌大学文化学部長に就任。倉敷、作陽大学公開講座「百人百話」で「歴史・祝祭・神話、そして音楽」を講演（二十六日）。インタヴュー「旧幕臣と近代日本の黎明」を『歴史読本』に掲載。

五月 奈良の私立東洋博物館に九十九豊勝を訪れる。「明治事物起原」のひとつの読み方」を石井研堂『明治事物起原 第一巻』ちくま学芸文庫に掲載。

六月 坪内祐三との対談「固有名詞の想像力―『明治事物起原』のおもしろさ」を『ちくま』に掲載。

七月 季刊『国際交流』第76号「特集 劇場としての身体・都市・宇宙」を監修、高山宏との対談「都市は劇場」を掲載。

十月 NHK人間大学「知」の自由人たち」の講師を担当（十二月）。

十二月 東京国立近代美術館講堂で行われた「第21回文化財の保存に関する国際研究集会 今、日本の美術史をふりかえる」に参加、「近代日本における画家のアイデンティティ―美術と非美術の境界の諸問題」を報告。

一九九八(平成十)年 六七歳

三月 ウィーン記号学センターでの国際シンポジウム「セックスの記号学」に参加。

四月 上野千鶴子と対談（十四日）。

五月 日本記号学会会長に就任。愛知県半田勤労福祉会館にて知多半島総合研究所主催のシンポジウムに参加、基調講演「変革期の日本人」を行う。

六月 東京純心女子大学 純心ギャラリー「川村龍俊コレクション展」での関連イベントで「芸術の快楽―私は何

を見て何を聞いたか」を講演（一日）。北方文化フォーラムで「語学教育について」講演（十六日）。上野千鶴子との対談「エロス・カオス・コスモス」を『群像』に掲載。

七月 青森県三沢市公会堂で行われたシンポジウム「テラヤマ・ワールドにおける青森県」に参加、基調講演「テラヤマ・ワールドにおける土俗性と前衛性」を行う（二十五日）。

九月 徳島県美馬郡にある旧青木邸でのイベント第6回「燃えさかる西陽」音楽祭でエリック・サティについて語り、森村泰昌と対談（十九日）。群馬県立近代美術館・高崎市美術館「パトロンと芸術家―井上房一郎の世界展」のための記念講演を行う（二十六日）。同展カタログに「井上房一郎をめぐる人々―大正と昭和前期」、磯崎新との対談「井上房一郎をめぐって、あるいは「視線の快楽」をこえて」を掲載。

十一月 勉強会として「楽講」を提案し、第一回として「歌劇「ペレアスとメリザンド」をめぐって」を下北沢のユニバーシティ・クラブで開催（二十四日）。

十二月 NHK人間大学のテキスト「知の自由人たち」に大幅加筆した『知の自由人たち』をNHKライブラリーの一冊として出版。

一九九九年（平成十二年） 六八歳

一月 新宿紀井国屋ホールで行われた映画「ミステリアスピカソ」の関連イベント「創造と伝統―ピカソの場合 一九世紀から二〇世紀へ」で横尾忠則、大島清次とトークショーに参加（八日）。

二月 北海道開発局技術研究発表会で講演「北海道における開発・技術・文化」を行う。銀座の画廊「巷房」にて

「越境の人 山口昌男ドロッキング展」を開催(二十二日～三月六日)。

三月 町田市立博物館での「のらくろー田河水泡生誕百年記念展」関連イベントとして「田河水泡を読むー近代日本漫画のアルケオロジー」を講演(七日)。「日本近代における経営者と美術コレクションの成立ー益田孝と柏木貨一郎」を『比較文化論叢ー札幌大学文化学部紀要』に掲載。

四月 札幌大学・札幌大学女子短期大学部学長に就任(一日)。淑徳大学大学院で「文化人類学特論」を講義。

五月 パリ、エコール・デ・ゾート・ゼチュード・アン・シアンス・ソシアルで岡本太郎について特別講義を行う(四日)。

六月 T P S サロンの会で「都市の劇場を考える」を講演(十一日)。「楽講」の第二回として「バリ島のガムランとワヤンクリツ」を赤坂のインドネシア料理店ジュンバタンメラで開催(二十六日)。

七月 ベルギーで行われた世界大学学長会議に参加。

八月 “Toys in Children's Culture in the Early 20th Century Japan - on the Theory of Heizaburo Takashima” を『比較文化論叢ー札幌大学文化学部紀要』に掲載。

九月 第25回北海道建築士会全道大会で基調講演「環境と建築」を行う(三日)。有楽町マリオンで開催された道元禅師フォーラム記念シンポジウム「禅といま」に参加(四日)。エジプト、カイロ大学日本研究科創立三十周年記念シンポジウムに出席。

十月 ドイツ、ドレスデンの工科大学で行われた国際記号学会の「ロシア記号学」セッションに参加。立命館大学末川記念会館ホールでアート・リサーチセンター秋季特別講演会で「現代芸術における漫画的なもの」を講演

(二十一日)。東京都立大学開学五十周年記念講演「危機の中の知性」を行う。丸善・京都河原町店7Fギャラリーにて「山口昌男 ドロイーイング展」を開催(二十三日〜三十一日)。ドロイーイング展の関連イベントで今福龍太との対談「カリカチュアをめぐる」を行う。鹿児島で開催された「第22回日本文化デザイン会議」に出席(三十日)。「民族学と岡本太郎」を『ユリイカ』に掲載。

十一月 津島佑子と対談(五日)。国際日本文化研究センターで行われたシンポジウム「文化的境界を超えて―相互人類学の彼方・国際コミュニケーションの倫理をめざして」にて「自分を殺す優雅な技術―異人になるための戦略」を講演(十一日)。札幌ナイト・スクールで今福龍太とトークショー「いま、移りゆく時を越えて―多文化に生きる」(二十日)に参加。

二〇〇〇(平成十二年) 六九歳

一月 津島佑子との対談「21世紀への対話1 流れる言葉、交わる言語」を『新潮』に掲載。

二月 銀座伊東屋で板祐生の展覧会を見る(二十一日)。「敗者学のすすめ」平凡社を出版。

三月 日本ヒューレット・パッカー社のビジネスコンピュータ・ユーザ研究会で基調講演「サイバーネットワークとヒューマンネットワーク」を行う(三日)。桑沢デザイン塾特別講座「デザインの21世紀」で「オール・デコと東洋」を講演(十一日)。

四月 「楽講」の第三回として「祝いの時 歌曲とピアノと雅楽による」木戸先生の古希と内田繁さんの受賞をお祝いして」を文京区目白台の和敬塾にて開催(三日)。シアターX(カイ)で行われた「国際フル祭2000」(二十

日(三十日)の実行委員長を務める。

五月 早稲田大学政経学部にて「文化人類学における境界」を講義(七月)。日本記号学会第二十回大会「コレクションの記号学」でのシンポジウム「コレクションの記号学と日本のコレクター」で司会を務める(三十日)、同会翌日のシンポジウム「コレクションの記号学のアクチュアリティ」に参加。淑徳大学公開講座で「パリと私」を講演(三十一日)。

七月 『図書新聞』のインタビューを受ける(二日)。鳥取県西伯町「板祐生出会いの館」を訪ねる。「笑い」国際学会で講演。北大スラブ研究センターのシンポジウム「ロシア文化―新世紀への戸口に立って」に参加。沼野充義の司会でカール・アイメルマツハー(ドイツ・ルール大学)と対談「ロシア文化―東と西の視点」を行う(十二日)。

八月 小田急百貨店で行われた「テラヤマ・ワールド 寺山修司展―きらめく闇の宇宙」(二日(二十日)を監修。いわみざわ彫刻アートキャンプ2000での「パブリックアートシンポジウム」にゲストパネラーとして参加(三十一日)。

九月 ロングインタビュー「知の風景を一変させた山口ワールド」を『図書新聞』に掲載。

十月 南仏ペリゴールで開催された日仏シンポジウム「二十一世紀日本のイメージ」に参加(このシンポジウムに出席するために期限切れのパスポートで出国したが、無事再入国を許される)。神奈川県立歴史博物館での展覧会「さよなら20世紀―カメラがとらえた日本の100年」記念講演会で講演(八日)。札幌大学山口文庫の蔵書約三千冊を使い小樽文学館で「山口昌男氏の、(仮設)書物の神話学」展(二十日(十一月十二日)が開催される。展覧会イベントで「仮説・仮説論」を講演(二十八日)。銀座ガスホールで開催された「熊野学シンポジウム―祝祭の地 熊野への誘い」に参加(二十五日)。

十二月 江戸東京博物館でのシンポジウム「幕末明治における江戸東京文化の受容と発信」に参加、「明治における無用者の学問」を報告（九日）。アトピッツ子地球の子ネットワーク公開講座で「免疫機構・文化・アトピー」を講演（十日）。

二〇〇一（平成十三年） 七〇歳

一月 青山ブックセンター本店カルチャーサロンで『内田魯庵山脈―失われた日本人』発掘』刊行記念ライブトークを行う（十日）。佐谷和彦と舞鶴を訪れる（十一・十二日）。今福龍太と札幌大学学長室ギャラリーで対談（二十五日）。『内田魯庵山脈―失われた日本人』発掘』晶文社を出版。

二月 坪内祐三と対談（九日）。

三月 銅版画家・出久根育にエッチングの指導を受ける。第12回札幌大学「国際文化フォーラム」に参加、京極夏彦と札幌時計台ホールで公開対談「SF小説と平安文化」を行う（十四日）。インタビュー「敗者」から日本近代を読み変える」を『文學界』に、今福龍太との対談「アフリカをめぐる―25年の対話の涯に」を『山口文庫通信』に掲載（八月）。『はみ出しの文法―敗者学をめぐる―』平凡社を出版。

四月 帯広市で開催された「第20回世界ホラふき大会」で審査員を務める（二日）。釧路市立美術館で開催された「細江英公の写真1950―2000」のオープニング・イベントで細江英公と対談（二十一日）。六本木STB139 スイードベイジルで行われた『エル・ジャポン』創刊200号記念イベント「Cocteau Night」で講演（二十四日）。坪内祐三との対談「魯庵・バルト・ベンヤミン」を『群像』に掲載。

五月 愛媛県、高島華宵大正ロマン館での展覧会「蝶々と人魚展」大正のシンボル」の関連イベントで「蝶々と人魚」を講演(十二日)。高知での「寺山修司展」関連イベントで「時代を挑発する―寺山修司をめぐる―」を講演(十三日)。札幌大学とイタリア、ラベンナ市立芸術大学との姉妹校提携のミーティングのためイタリア、ラベンナを訪れる。ラベンナ市立芸術大学・ラヴェンナ市立美術館等の共催でサンタ・マリア・デッレ・クローチ展示スペースにてドロ잉・エッチング展 “La terra che danza” を開催(二十五日～六月十七日)。

六月 脳内出血で武蔵野日赤病院に入院(二十一日)。

七月 退院(十日)。

九月 東京・府中芸術劇場、平成の間にて、古稀を祝う会「あの世まであと五十歩」を開催。無用亭編『山口昌男山脈―古稀記念文集』(私家版)を出席者にプレゼントする(九日)。

二〇〇二(平成十四)年 七一歳

三月 北海道立文学館で行われた「ヴィジュアル・ポエトリー2002・イン札幌+」に出品。学長室ギャラリーにて窪島誠一郎と対談、榎本了彦、窪島誠一郎と寺山修司について鼎談(十七日)。

四月 北海道立文学館で行われた「寺山修司の光と闇」トークセッションに出席。

五月 産業経理協会主催経理部長会月例会で「経営者と芸術」を講演(十四日)。

六月 北海道立美術館で「岡本太郎と縄文」を講演。

七月 藤女子大学で開かれた坂口安吾研究会にて「安吾とファルスの精神」を講演(十三日)。北海道、浦河町にあ

る「べてるの家」を訪問（二十九日）。個人雑誌『山口昌男山脈』創刊号に自伝インタビュー「回想の人類学」（聞き手・川村伸秀）を連載。

八月 NIE 全国大会にて「新聞広告から見えるもの」を講演（二日）。札幌パークホテルでの癒しの環境研究会で「ひとの感性と癒し」を講演（二日）。

九月 高野文子と銀座、龍潭酒家にて対談。

十月 今福龍太編集による『山口昌男著作集第1巻 知』筑摩書房を出版。

十二月 『山口昌男著作集第2巻 始原』筑摩書房を出版。

二〇〇三（平成十五年） 七十二歳

一月 『山口昌男著作集第3巻 道化』筑摩書房を出版。

二月 『山口昌男著作集第4巻 アフリカ』筑摩書房を出版。

三月 北海道教職員組合主催の自主編成講座で「大正自由教育からのメッセージ」を講演（十五日）。坪内祐三と『山口昌男著作集』刊行記念対談を東京・青山ブックセンターで行う。学長室解体記念パーティーに出席（二十六日）。札幌大学学長を退任。『山口昌男著作集第5巻 周縁』筑摩書房を出版。

四月 札幌大学特認教授に就任。

五月 『山口昌男ラビリス』国書刊行会を出版。

六月 近藤ようこと池袋、華湘にて対談（三日）。第六回「もののふたちの字曆書展」に書を出品（アートサロンアクロ

ス、六日(十七日)。沖縄アイリッシュパブ「モリガンズ」で行われた「ブルームズデイ・イン・オキナワ」(今福龍太主宰)に出席(十六日)。金武坤訳、韓国語版『文化の両義性』Minumsa社を出版。

七月 『山口昌男ラビリンス』刊行記念イベント「出会いのコスモロジー ラビリンスVSカーニヴァル」(東京堂)で高山宏と対談(十三日)。今福龍太と石狩河口「あいはら」にて対談(司会・石塚千恵子)。浦河べてるの家、第二回訪問(二十七日)。

十一月 第九回「森林と市民を結ぶ集い 北海道二〇〇三」での鼎談「森と文化」にチカップ美恵子、辻井達一と出席(一日)。愛媛県立美術館で行われた華宵会イベント「やまぐちまさお「山口昌男」を語る」で大野秀(米子市立図書館司書)による公開インタビュー(二十九日)。

十二月 名瀬市中央公民館で行われた奄美自由大学(今福龍太主宰)のイベント「群島に学び逸れる」に出席(二十三日)。銀座ローゼンタールにて越智義朗(越智ブラザース)と対談。

二〇〇四(平成十六年) 七三歳

一月 出久根育と対談(十四日)。

三月 『経営者の精神史―近代日本を築いた破天荒な実業家たち』ダイヤモンド社を出版。

四月 未発表論考「道化と幻想―アイコンの遊戯」を『山口昌男山脈』第4号に掲載。

六月 富士の裾野にあるフレデリック・スタールの墓参。膀胱炎から腎盂炎を併発し野村病院に入院(八月)。

二〇〇五(平成十七)年 七四歳

三月 札幌大学特認教授を退任。呉正煥訳、韓国語版『敗者』の精神史』Hange社を出版。
四月 札幌大学山口文庫文庫長に就任。

(文中敬称略)

山口昌男 著・訳書一覽

1. 〈翻訳〉ジャック・ブリアール『青銅時代』(文庫クセジュ312) 白水社 1961・12・20
2. 〈翻訳〉アンリ・ラブレ『黒いアフリカの歴史』(文庫クセジュ330) 白水社 1962・9・20
3. 〈翻訳〉ユベール・デュシャン『黒いアフリカの宗教』(文庫クセジュ347) 白水社 1963・7・30
- 4―1. 〈編著〉『未開と文明』(現代人の思想15) 平凡社 1969・2・20
- 4―2. 〈編著〉『未開と文明』(現代人の思想セレクション3) 平凡社 2000・9・21
5. 『アフリカの神話的世界』(岩波新書青版774) 岩波書店 1971・1・28
- 6―1. 『人類学的思考』せりか書房 1971・3・31
- 6―2. 『新編 人類学的思考』筑摩書房 1979・11・20
- 6―3. 『人類学的思考』(筑摩叢書346) 筑摩書房 1990・11・30 解説…中沢新一

- 7-1. 『本の神話学』中央公論社 1971・7・30
- 7-2. 『本の神話学』(中公文庫)中央公論社 1977・12・10 解説…大江健三郎
- 8-1. 『歴史・祝祭・神話』中央公論社 1974・7・5
- 8-2. 『歴史・祝祭・神話』(中公文庫)中央公論社 1978・12・10 解説…渡辺守章
- 9-1. 『文化と両義性』(哲学叢書)岩波書店 1975・5・30
- 9-2. 『文化と両義性』(岩波現代文庫)岩波書店 2000・5・16
- 9-3. 〈韓国語版〉金武坤訳『文化と両義性』Minumsa社 2003・6・20
- 10-1. 『道化の民俗学』新潮社 1975・6・25
- 10-2. 『道化の民俗学』(筑摩叢書295)筑摩書房 1985・2・25 解説…高山宏
- 10-3. 『道化の民俗学』(ちくま学芸文庫)筑摩書房 1993・3・5 解説…高山宏
- 11-1. 『道化的世界』筑摩書房 1975・6・30
- 11-2. 『道化的世界』(ちくま文庫)筑摩書房 1986・1・28 解説…川本三郎
12. 『黒い大陸の栄光と悲惨』(世界の歴史6)講談社 1977・4・20
13. 〈翻訳〉クロード・レヴィ・ストロース『仮面の道』(叢書 創造の小径)新潮社 1977・8・10 共訳者…渡辺守章
14. 『シンポジウム 差別の精神史』(三省堂選書25)三省堂 1977・8・25 参加者…井上ひさし、野元菊雄、広末保、別役実、松田修、三橋修、由良君美、横井清

- 15—1. 『知の祝祭』 青土社 1977・11・20
- 15—2. 『知の祝祭——文化における中心と周縁』 河出文庫 1988・5・2 解説：三浦雅士
- 16—1. 『知の遠近法』 岩波書店 1978・4・20
- 16—2. 『知の遠近法』(同時代ライブラリー25) 岩波書店 1990・6・1 解説：川本三郎
- 16—3. 『知の遠近法』(岩波現代文庫) 岩波書店 2004・10・15 解説：川本三郎
- 17—1. 『石田英一郎〈河童論〉』(日本民俗大系8) 講談社 1979・1・10
- 17—2. 『河童のコスモロジー——石田英一郎の思想と学問』(講談社学術文庫) 講談社 1986・1・10(17—1.のタイトルを変更したもの)
18. 〈編集〉『歴史的文化像——西村朝日太郎博士古稀記念』 新泉社 1980・4・1 共編者：蒲生正男、下田直春
19. 〈対談集〉『二十世紀の知的冒険』 岩波書店 1980・4・23
- 20—1. 『仕掛けとしての文化』 青土社 1980・5・31
- 20—2. 『仕掛けとしての文化』(講談社学術文庫) 講談社 1988・3・10
- 21—1. 『道化の宇宙』 白水社 1980・7・23
- 21—2. 『道化の宇宙』(講談社文庫) 講談社 1985・9・15
22. 『共同討議 書物の世界』 青土社 1980・9・15 参加者：高階秀爾、中村雄二郎
23. 〈対談集〉『挑発としての芸術』 青土社 1980・10・20

- 24 『知の旅への誘い』(岩波新書黄版153) 岩波書店 1981・4・20 共著者…中村雄二郎
- 25 〈編著〉『書物—世界の穩諭』(叢書 文化の現在10)岩波書店 1981・9・18 共編著者…大江健三郎、
中村雄二郎
- 26—1. 〈監修〉『説き語り記号論』(ブリタニカ叢書) 日本ブリタニカ 1981・9・25
- 26—2. 〈監修〉『新装判 説き語り記号論』(ポリロゴス叢書) 日本ブリタニカ 1983・8・5
- 27 〈対談集〉『知の狩人 続二十世紀の知的冒険』岩波書店 1982・2・24
- 28 『FOOT WORK—足の生態学』PARCO 出版 1982・4・20 共著者…磯崎新、鈴木忠志、高橋康也
- 29 〈編著〉『文化の活性化』(叢書 文化の現在13) 岩波書店 1982・7・9 共編著者…大江健三郎、中村雄二郎
- 30 〈対談集〉『フランス』岩波書店 1983・5・23 参加者…實重彦、渡辺守章
- 31 〈連続講演〉『文化人類学への招待』(岩波新書黄版204) 岩波書店 1982・9・20 解説…大江健三郎
- 32—1. 『文化の詩学1』(岩波現代選書79) 岩波書店 1983・6・23
- 32—2. 『文化の詩学1』(特装版 岩波現代選書) 岩波書店 1998・7・6
- 32—3. 『文化の詩学1』(岩波現代文庫) 岩波書店 2002・9・18
- 33—1. 『文化の詩学2』(岩波現代選書80) 岩波書店 1983・7・22

- 33—2. 『文化の詩学2』(特装版 岩波現代選書) 岩波書店 1998・7・6
- 33—3. 『文化の詩学2』(岩波現代文庫) 岩波書店 2002・10・16 解説/稲賀茂美
34. 〈編著〉『見世物の人類学』三省堂 1983・10・25 共編著者/ヴィクター・ターナー
- 35—1. 〈インタビュー〉『語りの宇宙——記号論インタビュー集』冬樹社 1983・11・30 聞き手/三浦雅士
- 35—2. 〈インタビュー〉『新装判 語りの宇宙——記号論インタビュー集』(冬樹社ライブラリー) 冬樹社
1990・10・20 聞き手:三浦雅士
- 36—1. 『SCRAP BOOK 1/笑いと逸脱』筑摩書房 1984・1・30
- 36—2. 『笑いと逸脱』(ちくま文庫) 筑摩書房 1990・6・26 解説/中森明夫
37. 『SCRAP BOOK 2/文化と仕掛け』筑摩書房 1984・3・5
38. 『演ずる観客——劇空間万華鏡 1』白水社 1984・5・31
39. 『流行論』(週刊本1) 朝日出版社 1984・10・1
40. 『旅と祝祭都市——象徴人類学的アプローチ』(旅とトポスの精神史) 岩波書店 1984・11・9
41. 〈編著〉『火まつり』リブポート 1985・5・20
42. 〈編集〉『林達夫座談集 世界は舞台』岩波書店 1986・5・15
43. 『スクリーンの文化英雄たち』潮出版 1986・5・20
44. 『SCRAP BOOK 3/冥界遊び』筑摩書房 1986・7・5
45. 『文化人類学の視角』岩波書店 1986・9・19

- 46 〈編著〉『越境スポーツ大コラム』TBSブリタニカ 1987・3・16
- 47 〈対談集〉『知のルビコンを超えて——山口昌男対談集』人文書院 1987・7・10
- 48 〈座談会〉『異人・河童・日本人——日本文化を読む』新曜社 1987・11・25 参加者…住谷一彦、坪井洋文、村武精一
- 49—1. 〈対談集〉『ミカドと世紀末——王権の論理』平凡社 1987・11・25 対話者…猪瀬直樹
- 49—2. 〈対談集〉『ミカドと世紀末——王権の論理』(新潮文庫) 新潮社 1990・10・25 対話者…猪瀬直樹
- 49—3. 〈対談集〉『ミカドと世紀末——王権の論理』(小学館文庫) 小学館 1998・4・1 対話者…猪瀬直樹
- 50 〈日本語版監修〉オルネラ・ボルタ(椋田直子訳)『サティ イメージ館』音楽之友社 1987・11・30
- 51 〈対談集〉『山口昌男対談集 身体の想像力——音楽・演劇・ファンタジー』岩波書店 1987・12・16
- 52 〈講演集〉『学校という舞台——いじめ・挫折からの脱出』(講談社現代新書893) 講談社 1988・3・20
- 53 『モーツァルト好きを怒らせよう——祝祭音楽のすすめ』第三文明社 1988・8・25
- 54—1. 『天皇制の文化人類学』立風書房 1989・3・31
- 54—2. 『天皇制の文化人類学』(岩波現代文庫) 岩波書店 2000・1・14
- 55 『「知」の錬金術』講談社 1989・6・20
- 56 〈対談集〉『古典の詩学——山口昌男国文学対談集』人文書院 1989・10・30
- 57 〈対談集〉『オペラの世紀——山口昌男対談集』第三文明社 1989・11・15

- 58 『知の即興空間——パフォーマンズとしての文化』 岩波書店 1989・12・19
- 59 『のらくろはわれらの同時代人——山口昌男・漫画論集』 立風書房 1990・3・20
- 60 『気配の時代』 筑摩書房 1990・4・20
- 61 『宇宙の孤児——演劇論集』 第三文明社 1990・11・20
- 62 『病の宇宙誌』 人間と歴史社 1990・12・5
- 63 〈編〉リチャード・モールトビー『20世紀の史 大衆文化 上——1900—45』 平凡社 1991・2・22
- 64 『トロツキーの神話学』 立風書房 1991・4・25
- 65 〈監修〉『反構造としての笑い——破壊と再生のプログラム』 ZETI出版 1993・2・24
- 66 『自然と文明の想像力』 宝島社 1993・6・11
- 67 『ヴェネツィア——栄光の都市国家』 東京書籍 1993・11・10 共著者…饗庭孝男、陣内秀信
- 68—1. 『挫折』の昭和史 岩波書店 1995・3・24
- 68—2—1. 『挫折』の昭和史(上) 岩波書店 1995・3・16
- 68—2—2. 『挫折』の昭和史(下) (岩波現代文庫) 岩波書店 2005・4・15 解説／福田和也
- 69—1. 『敗者』の精神史 岩波書店 1995・7・21
- 69—2. 〈韓国語版〉呉正煥訳『敗者』の精神史 Hangeul社 2005・3・10
- 69—3—1. 『敗者』の精神史(上) (岩波現代文庫) 岩波書店 2005・6・16
- 69—3—2. 『敗者』の精神史(下) (岩波現代文庫) 岩波書店 2005・7・15 解説／坪内祐三
- 70 〈編著〉『映画伝来——シネマトグラフと〈明治の日本〉』 岩波書店 1995・11・25 共編著者…木下直

之、吉田喜重

- 71 〈監修〉『日本肖像大事典 上』日本図書センター 1997・1・25
- 72 〈監修〉『日本肖像大事典 中』日本図書センター 1997・1・25
- 73 〈監修〉『日本肖像大事典 下』日本図書センター 1997・1・25
- 74 〈編集〉内田魯庵『魯庵の明治』(講談社文芸文庫) 講談社 1997・5・9 共編者…坪内祐三
- 75 〈監修〉『周縁からの文化』(21世紀に遺す) 蒼洋社 1997・11・25 参加者…高橋文二、神尾登喜子、廣川勝美
- 76 〈編集〉内田魯庵『魯庵日記』(講談社文芸文庫) 講談社 1998・7・10 共編者…坪内祐三
- 77 『知の自由人たち』(ZINライブラリー95) 日本放送出版協会 1998・12・20
- 78 『踊る大地球——フィールドワーク・スケッチ』晶文社 1999・3・5 解説…杉浦日向子、聞き手…畑中純、中川六平
- 80 『敗者学のすすめ』平凡社 2000・2・21
- 81 〈監修〉『目でみる日本人物百科1』日本図書センター 2000・3・25
- 82 〈監修〉『目でみる日本人物百科2』日本図書センター 2000・3・25
- 83 〈監修〉『目でみる日本人物百科3』日本図書センター 2000・3・25
- 84 〈監修〉『目でみる日本人物百科4』日本図書センター 2000・3・25
- 85 〈監修〉『目でみる日本人物百科5』日本図書センター 2000・3・25

- 86 〈監修〉『目でみる日本人物百科6』日本図書センター 2000・3・25
- 87 〈監修〉『目でみる日本人物百科7』日本図書センター 2000・3・25
- 88 〈監修〉『目でみる日本人物百科8』日本図書センター 2000・3・25
- 89 『独断的の大学論——面白くなければ大学ではない!』ジーオー企画出版 2000・10・20
- 90 『内田魯庵山脈——失われた日本人』発掘』晶文社 2001・1・10
- 91 〈対談集〉『はみ出しの文法——敗者学をめぐって』平凡社 2000・3・21
- 92 〈編集〉『山口昌男山脈——古稀記念文集』私家版 2001・9・9
- 93 今福龍太編・解説『山口昌男著作集1知』筑摩書房 2002・10・25
- 94 今福龍太編・解説『山口昌男著作集2始原』筑摩書房 2002・12・25
- 95 今福龍太編・解説『山口昌男著作集3道化』筑摩書房 2003・1・25
- 96 今福龍太編・解説『山口昌男著作集4アフリカ』筑摩書房 2003・2・25
- 97 今福龍太編・解説『山口昌男著作集5周縁』筑摩書房 2003・3・25
- 98 『山口昌男ラビンス』国書刊行会 2003・5・30
- 99 『経営者の精神史——近代日本を築いた破天荒な実業家たち』ダイヤモンド社 2004・3・4